

教室の中のレイチェル・カーソン

——環境文学教育の可能性を求めて——

上 岡 克 己

概 要

ネイチャーライティングや環境文学の研究が始まって20年以上が経過し、日本においても数多くの研究書やガイドブック、論文が書かれるにいたった。とりわけ日本における英米文学研究の分野では、文学の緑化は確かな足跡を残してきた。しかしながら、環境文学の意義や理念をどのように教育するか、またその教授方法に関する論考はほとんど目にするのではない。一方、アメリカでは *Teaching North American Environmental Literature* (2008)¹をはじめとして、環境文学教育やその教授方法を扱った書が幾冊か出版され、そこで提案された教授法が広く浸透している。日本においてこの分野の研究が著しく遅れていることを痛感せざるをえない。

もちろん日米の環境文学教育を単純に比較することはできない。そもそも日本においては環境文学教育に携わる教員の絶対数の少なさ、組織やカリキュラム、予算の制約があり、環境文学教育を実践する上で足枷となっている。そのような制約下においても環境文学は従来にない可能性を秘めた教育分野であると思う。本稿は筆者の長年にわたる教育実践をもとに、環境文学教育とその教授方法を考察し、環境文学教育の可能性と活性化を意図したものである。

取り上げた作家はレイチェル・カーソン、言わずと知れた環境文学では著名な作家である。彼女の生き方や彼女の著書、特に世界を変えた本（『沈黙の春』）に出会えることは学生にも有意義であると思ったからである。筆者の基本的スタンスは、地球環境問題を契機に生じた人類や他の生命体の危機に対して、私たちは叡智をもって対応する必要がある、それは単にテクノロジーに頼るのではなく、多くの作家たちの環境的想像力から生まれたものでなくてはならない。授業では学生の環境的想像力を刺激し、エコロジカルなアイデンティティを確立させることに焦点をあてた。

環境文学教育の特徴は、何よりも学際的 (interdisciplinary) であり、その他従来の英米文学教育が客観的な批評に終始し、できるだけ主観を避けてきたのに対して、自己を大いに語れること (narrative scholarship)²である。これによって授業の自由度は格段に広がった。さらに現在の大学に要請されている社会や地域 (place) とのつながりが、日本の環境文学 (地域密着型の文学形式) に言及することで可能になることである。アメリカの実践例と比較すると様々な課題が見えてくるが、だれかがどこかで環境文学を叫んでいることがこの国には不可欠なのである。

1. 教室と現実的世界をつなぐ——自己を語る緑の文学

2012年度1学期(前期)「環境文化論」の講義は、異様な雰囲気の中で始まった。前年度の東日本大震災、それに伴う福島原発事故の終焉がまだ見えない中、月曜日1時限という学生がもっとも嫌う時間帯にもかかわらず、各学部から150名を超す学生が履修を希望した。シラバスの授業目標には、今年(2012年)が世界を変えた本『沈黙の春』出版50年にあたり、著者レイチェル・カーソンの人と思想を環境の視点から再考する旨を記していた。原発事故による放射能汚染の危機を敏感に感じ取った学生には、好奇心をくすぐるような授業と思われたにちがいない。

実際のところ、2012年はカーソンの不安が次々と現実化した年でもあった。5月には利根川水系の浄水場から基準値を超えるホルムアルデヒド(接着剤や塗料などに使用される化学物質)が検出され、約35万世帯で断水を余儀なくされた。さらに同じころ、大阪市ではオフセット校正印刷会社の工場で、インク洗浄に使用されていた有機溶剤によって胆管がんにかかり、死亡していた従業員がいることが判明し、その後全国でもいくつかの例が見つかった。6月には水俣病研究の第一人者原田正純氏が死去した³。一方で、『苦海浄土——わが水俣病』を出版し、日本の環境文学の先駆的作家、石牟礼道子氏が病にもかかわらずテレビに出演して、あらためて水俣病患者の救済を訴えていた。

8月28日環境省はニホンカワウソが絶滅したと公表した。すでに授業は終わって夏期休暇に入っていたが、カーソンの関心事の一つである「絶滅」については、まさしくニホンカワウソを例に語っていたのである。というのも野生のニホンカワウソが最後に目撃された高知県須崎市を流れる新莊川は、筆者が幼い頃遊んだ川であったからだ。ニホンカワウソの絶滅は、アルド・レオポルドが『野生のうたが聞こえる』で語った「リヨコウバトの記念碑について」を思い出す——「ひとつの種の絶滅を後世に伝える記念碑が建立された。これはわれわれ人間の遺憾の意の象徴である」(175)、「ひとつの種がほかの種の死滅を悼むということは、天地開闢以来の新たな出来事である」(177)。筆者もアメリカにならって新莊川を見下ろす丘の上にニホンカワウソを悼む記念碑を建てたい。そこには野生生物を絶滅におとしめた私たち人類の愚行の数々を綴ることにしよう⁴。

このようにカーソンを語りながら、授業は現実世界との接点を持ち続け、環境文学の特性を活かした「自己を語る」という手法を用いて進む。

地域とのつながり

環境文学のもう一つの特徴は、地域とのつながりに言及できることである。長らくアメリカ文学を教えてきたが、現実社会との接点こそあれ、地域とのつながりは皆無であった。おそらくほとんどの外国文学研究者が痛感していることであろう。ところが環境文学というジャンルでは、日本文学も含まれるのでその可能性は一段と広がってゆく。例えば高知県に関しては、世界的な植物学者牧野富太郎の生誕地であり、彼は植物に関する多くのエッセイを残し、彼を記念した牧野植物園もある。また寺田寅彦は東京生まれだが、両親の故郷である高知市で少年時代を過ごしている。彼の著書が大震災以降、「災害文学」として高く評価されているのは周知の事実である。さらにあまり知られてはいないが、生涯をかけて『セルボーン博物誌』(ネイチャーライティングの原点となる書)を訳した西谷退三という風変わりな男もいた⁵。この人物の生涯を語るのも結構面白い。『セ

ルポーンの博物誌』は西谷にとって人生のすべてを捧げるにたる名著だったのである。その他舞台としての四万十川はよく取り上げられ、有名なところでは野田知佑『日本の川を旅する』で描かれている。

地域とのつながりと言っても、県外出身者が7割を占める状況では、他県にも触れなくてはならない。北海道なら知里幸恵『アイヌ神謡集』、東北なら宮澤賢治の著書、関東なら国木田独步『武蔵野』、近畿なら南方熊楠の著書、有吉佐和子『複合汚染』、九州なら先に述べた石牟礼道子、屋久島の詩人山尾三省など。彼の屋久杉を詠んだ「聖老人」は短いものだから、授業でも紹介できる。東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市に住む畠山重篤『森は海の恋人』も捨てがたい。その他放射能汚染などについては、広島では井伏鱒二『黒い雨』、長崎では林京子『祭りの場』が対象となる。こうなると「場所の感覚」を意識した文学、日本のネイチャーライティングの授業になりかねないが、日本文学との接点を持っていることが、環境文学教育の強味である。外国ではソローの『森の生活』を推薦する。さらに、フランス人作家ジャン・ジオノの有名な『木を植えた男』などを紹介すれば、教員の授業意図がいっそう理解しやすくなるかもしれない⁶。

テキストが決める授業の性格

毎回悩まされるのがテキストの選択である。対象学生を第一に選ぶことになるが、特殊な作家よりも代表的な古典的作家を選びたい。今回は先に述べたような理由で、レイチェル・カーソンを取り上げた。英文で書かれたテキストなら、ブルックスの *The House of Life: Rachel Carson at Work* をすすめる。今回の授業は英語・英米文学専攻者を対象とはしない、専門科目ではあるが共通教育の教養科目に相当するようなものなので、英文のテキストは最初から除外した。日本で出版されたカーソン関係の著書もいくつかあるが、筆者が企画から編集・校正に関わった上岡・上遠・原共編著『レイチェル・カーソン』（ミネルヴァ書房、2007）を使用した。

本書の意図は、カーソン生誕100年にあわせ、あらためて彼女の実像に迫ろうとするもので、構成は彼女の生涯、著書のエコクリティカルな解釈、その他作家、環境教育、幼児教育、野外実習の専門家からの寄稿も含まれている。さらに数多くの写真やコラム（専門用語の解説からカーソンの人柄）、著書からの名言（英文を含む）、詳しい年譜や参考文献を取り入れ、これ一冊でカーソンの全体像が理解できるように配慮された入門書であり、専門書と言える。テキストとしては今までになく充実しており、大変教えやすい教材となっている。多くの教員が懸念するように、テキストが授業の性格（楽しさ、面白さ、知的関心）や良し悪しを決めるので、テキスト選択には慎重でありたい。

授業の構成は以下のとおりで、テキストにあわせて進んだ。

第1回 オリエンテーション（授業内容の説明、テキストの説明、カーソンの生涯に関するビデオ鑑賞） 第2～4回 カーソンの生涯 第5～6回 海の三部作 第7～9回 『沈黙の春』 第10～12回 『センス・オブ・ワンダー』 第13～14回 『失われた森』 第15回 レポート提出

テキストにカーソンに関する基本的情報は網羅されているので、特にハンドアウトは作成しなかったが、補足の意味で著書からの引用、新聞の切り抜き、関連図書からの抜粋は適宜利用した。さらに授業が単調にならないように、カーソンに関するビデオを何回か鑑賞した。パワーポイントを活用するのもいいだろう。現在の大学教育で、90分の授業時間を一方的な講義だけでもたせるのは容易なことではないのである。一方通行の講義なので、質問は授業終了後かオフィスアワーにと言っておいた。残念ながら内容に関する質問はほとんど出なかった。学生の反応はレポートでしか

わからなかったが、自然や環境について考える機会をもてたことには満足していたようだ。

2. べつの道を歩む——レイチェル・カーソンの生涯⁷

オリエンテーションの次週第2回目は、まもなく迎える4月22日は何の日かという質問から授業を開始する。日本では新学期が始まったばかりで、どの大学でも存在感が希薄であるが、紛れもなくカーソンの影響をうけて始まった「アースデイ(地球の日)」なのである。レイチェル・カーソンについて学生に質問してみると、名前だけは聞いたことがあるという。さらに聞いてみると、中学校3年の英語の教科書(『ニューホライズン』東京書籍)に、カーソンが20世紀の偉人のひとりとして取り上げられているのである。もちろん中学校レベルでの簡単な英語での紹介文だが、カーソンの著作が環境問題とともに解説されていた。15歳前後で読む教科書の影響は想像以上に大きいものがある。大学入学以前の環境教育の重要性をひしひしと感じる。

1学期90分15回(実質14回)の授業のうち3回分をカーソンの生涯にあてる。通常のアメリカ文学の講義ではありえないことは十分承知の上、あえてカーソンの生涯にこだわった。というのも筆者自身がカーソンの生涯に感動し、その感動を学生に伝えたかったからにはほかならない。それだけカーソンの生き方は魅力が尽きないのである。もちろん時間的制約は避けられないところで、いかにカーソンの真髓を要領よく伝えるか、これは究極のところ、教員の教授法に拠るところが大きい。筆者は後述するように、カーソンの生涯から学生の興味を喚起させるような人生の一コマを選び、精一杯生きて一人の人間像を提示した。

カーソンの生涯はテキスト第1章「レイチェル・カーソンの生涯」に描かれており、授業もそれに沿って進める。カーソンの生涯については、リング・リア『レイチェル——レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』が出版されて以降、実像が明らかにされた。一般的な印象では、孤独で内気な性格、冷たい科学者を連想させるが、リアはカーソンを女性差別の激しい時代に勇気をもって立ち向い、真理を求める自立した女性と定義する。筆者もその方向でカーソン像を描いて見せた。

カーソンの生涯を語るには、まず最初に彼女の自然観がどのように形成されたかに言及する必要がある。多くの批評家が指摘するのは、彼女が自然豊かな農場(果樹園)の中で育ったこと、母親のマリアが娘の自然観を育み、さらに文学の世界へと想像力を飛翔させたことである。カーソンの生涯を考えると、大学入学以前の問題、特に幼児や小学生の頃までの家庭における自然体験や読書体験が、将来の環境意識と大いに関連性があることを再認識させられる。これは本稿のメインテーマの一つ『センス・オブ・ワンダー』で再度触れることになる。

人生のターニングポイント

だれしも人生の分岐点に直面して、どちらかの道を選択せざるをえない時機がある。受講生の学生も本学を選択したときが、人生の重要なターニングポイントの一つであり、次は就職のときだろうと語る。『沈黙の春』の最終章でカーソンはアメリカの詩人フロストの有名な詩“The Road Not Taken”を引用し、人類がこれから先の歩むべき道を示唆しているが、まさしくそれは「あまり人の通らない」困難な道を選ぶこと意味していた。カーソンもまさしくその道を選んだ⁸。

第1のターニングポイントは、大学2年生の時に専攻を英文学から生物学へと変える決心をした

ことである。当時女性にとって英文学（アメリカでは国語）の方がはるかに就職には有利であった。というのも差別や偏見の厳しい時代で女性が唯一能力を発揮できる場所が教員であったからである。それを押しのけて、生物に専攻を変えたのは、子どもの時から生物に関心をもっていたとはいえ、ひとえに生物学の教授スキーカーの影響が強い。カーソンはスキーカーの真摯な探究心と熱意のある授業に惚れ込み、彼女の生き方と自らの将来を重ねたのであった。教員の一人として、このような授業ができるスキーカーが羨ましくも思う。さらにテニソンの詩「ロックスレー・ホール」の一節「稲妻を抱きて吹く激しき風をのみ込み / 雨 電 炎も雪も ロックスレー・ホールに降らば 降れ / 風が海へとうなりをあげて吹く 我 いざ漕ぎ出ださん」が彼女を後押しした。好きで選んだ道、あえて海洋生物学という女性にとってはまだ未開の領域に歩み出したが、生物学者への前途は多難を極めた。運悪く世界恐慌という時代の洗礼を受けた彼女にとって、ジョンズ・ホプキンズ大学大学院に進学したものの将来の展望は全く見えてこなかった。

そのころ彼女は思いもかけず第2のターニングポイントに直面する。1932年修士号を得て、大学の非常勤講師をしながら家計を助け、できればスキーカーのように大学の正規のポストを望んでいた彼女だったが、博士号を持つわけでもなく、海洋生物という特殊な分野において女性としての差別を経験したかもしれない。相変わらず先の見えない中、彼女はスキーカーを通して以前一度会ったことのある漁業局科学調査部長ヒギンズを訪ねた。このとき漁業局は「水の中のロマンス」という7分間のラジオ番組の脚本を書ける人物を探していたところであった。ヒギンズはカーソンにそれをすすめた。思いもかけぬ提案がカーソンの生涯を変えた。幼い頃からの文学的才能と、大学院での海洋生物の研究がここに見事に合流したのであった。カーソンは脚本を書き上げてヒギンズに応え、さらに翌年公務員試験を受検して合格し、漁業局に入局した。ヒギンズの貢献はまだある。ラジオの脚本のほか政府発行のパンフレットをカーソンに依頼し、彼女が書き上げた作品のレベルの高さを評価して、それを『アトランティック・マンスリー』誌に送るようにとアドバイスしたのである。これが後に「水のなか」として掲載され、カーソンが文壇に認められる契機となったのである。彼女の第一作『潮風の下で』は、運悪く太平洋戦争勃発と重なって世間からは無視された。しかし長年漁業局（1939年からは魚類・野生生物局に改称）に勤めたことが、海の作家として花開く礎となった。

第3のターニングポイントも思いがけず訪れた。1950年代半ば、数々の賞を受賞して名実ともにベストセラー作家の仲間入りを果たしたカーソンは、1958年1月、ある一通の手紙を受け取った。差出人は知人のオルガー・オーウェンズ・ハキンズ。彼女が所有する土地（鳥類保護区）の鳥がDDT散布により次々と死んでいく事実を明らかにし、カーソンにその事実を解明してほしい旨の内容であった。最初カーソンは自分は適任ではないと渋っていた。その理由は、彼女の専門は海洋生物学であって、いわゆる人工化学合成物質やその人体に及ぼす危険性、特に医学の分野の知識が不十分であったからである。しかしながら調査すればするほど生態系は悪化し、その影響は人間にも及んでいることを懸念したカーソンは、自らの内なる声に忠実であろうと決心した。「事態を知っているのに沈黙をつづけることは、私にとって将来もずっと心の平穏はない」（リア 470）であろうことを悟っていた。このようにして『沈黙の春』は誕生した。彼女は正確を期するために多くの文献にあたり、不明な箇所は直接研究者と連絡をとって確認している。まさに真理の探求者である。

『沈黙の春』執筆に専念していた最中、彼女の身体は癌に冒されていたことが判明した。『沈黙の春』執筆は、壮絶な癌との闘いのなかで行われていたのである。1962年彼女は終りに書き上げた。この本がアメリカ、いや世界を変えたのだった。長々とカーソンの生涯を辿ってきたが、作品解釈

には避けて通れない彼女の生き方を学ぶ必要性を感じたからに他ならない。

3. 作品論——ネイチャーライティングから環境文学へ

海の三部作

環境文学を専門とし、カーソンの文学的意義を高く評価しているはずの教員がいざカーソンを教えることに二の足を踏むのは、ひとえに彼女の専門的な科学的知識、特に海洋生物に関する知識と化学物質に関する知識である。たとえば筆者にしても海洋生物や化学物質にはまったく不案内で、『潮風の下で』、『われらをめぐる海』、『海辺』の生態を説明することはできない。しかしこれはソローの例と同様に、彼の膨大な動植物に関する知識にすべて精通していなくてもソローを論じることは可能である。ある程度のエコロジーの知識は不可欠であるが、環境文学研究者は思想面を重点的に論じても差し支えないと思う。もちろん自然や環境に関する知識は多ければ多いほどよく、『北米環境文学を教える』の中で「エコクリティックは科学に弱い」(257)と苦言を呈されないように、我々にとっても謙虚に学ぶ姿勢が必要である。

結局カーソンの海の文学に関しては、テキスト(第4章と第5章)を概説し、作品第一主義を優先して、先に述べた『海のなか』と、『われらをめぐる海』の中から『島の誕生』を読むことにした。前者は詩情豊かに海の魅力が語られた名文である。後者は島の生態が人間の関与により破壊を招いた例が紹介され、後のカーソンの主要テーマを想起させる。

『沈黙の春』を教える

『沈黙の春』への序章

まずは私的なナラティブから入る。以前化学物質過敏症患者を扱ったドキュメンタリー映画『いのちの林檎』(2011)を見たことがある。大人になってから突然発病した若い女性は、化学物質や電磁波により呼吸困難、昏睡、転倒を繰り返す。もはや都会での生活は困難で、清い空気を求めて母親とともに逃げ回る。しかしこの狭い日本に化学物質や電磁波から無縁な地はない。そのような中、青森県内のある農家が無農薬栽培で作っている林檎の存在を知り、彼女はそれで生をつないでいる。現在は化学物質の時代である。化学物質なくして生活は成り立たないのが現状である。そのようなビデオを見せたり、産業廃棄物の投棄で悲惨な状況に陥った出来事、ロイス・マリー・ギブス『ラブリックチャンネル——産廃処分場跡地に住んで』(『オルタナティブ』88)を紹介してから、本題に入る。

『沈黙の春』のエピグラフ(巻頭句)と第1章「明日のための寓話」は、原書のコピーを配付して説明する。シュバイツァー⁹、キーツ、ホワイトのエピグラフは、本書の内容を要約したもので、殺虫剤を初めとする化学物質汚染を世に警告した書という視点を転換し、「人間」が主人公である書、つまり内容は科学の話でも、根幹には私たち人間の生き方や思想が問われていることを喚起させる。

“A Fable for Tomorrow”を原書で読むのは、翻訳ではわかりづらいカーソンの巧みな文学的レトリックに触れさせるためである。授業はテキストにそって進むが、「世界を変えた本の一冊」であることを強調する。世界を変えた本にめぐり合えたのは、学生にとっても有意義だと思う。今年

(2012年)が『沈黙の春』出版50年にあたるが、環境、環境と叫ばれつつもまだわずか50年の話なのである。地球誕生から46億年、人類誕生から500万年を考慮しても、ここ100年で人類は地球という惑星を随分と傷つけ、変えてしまった。『沈黙の春』全体が悲壮感の漂う書であるが、カーソンの真意はどこにあるか見極めながら読むことを薦める。

授業ではすべての章に言及する時間的余裕はないので、どうしても選択的にならざるをえない。第1章、第17章(最終章)は解釈上必要で、省くことはできない。今回は学生にも身近な問題である癌を扱った第14章「四人に一人」をとりあげ、癌と環境との問題を一緒に考えることにした。「四人に一人」という章題であるが、現在では「二人に一人」と言われるほどで、「皆さんの半数が癌に罹る」という衝撃的な事実を告げた。人類は癌遺伝子を人類誕生以来持ち合わせており、長生きすることにより癌を発病する確率が高くなったことは確かである。直接的な要因はタバコと食物で、環境的要因は意外と少ない。ただ食物には目に見えない化学物質が含まれている可能性が高く、環境的要因を軽視することは好ましくない。実際のところ、癌は長年をかけて増殖するので、明確な要因の特定は極めて難しいと言わざるをえない¹⁰。

環境正義から言えば、貧困が癌をつくるというのも正しい。ある特定の職業に頻発する職業癌についてはよく知られている。スタイングレイバーの『がんと環境』は、癌と環境との間に明確な関係があることを暴露する。同じく彼女がナレーションを務めるドキュメンタリー映画『レイチェルの娘たち』(『オルタナティヴ』54)は、乳癌の原因究明プロジェクトに参加した人々の記録映画である。題名はもちろんのこと、乳癌患者であったレイチェル・カーソンに由来する。この映画の一部を授業でも流したのは患者の生の声を伝えたかったからであり、映画で特集された参加者のうち10人がすでに亡くなってしまったという厳粛な事実も伝えた。乳癌と言えば、テリー・テンペスト・ウィリアムス『鳥と砂漠と湖と』の最終章「片胸の女たち」を紹介するのもよいだろう。

「べつの道」¹¹は『沈黙の春』解釈上極めて重要な章である。すでに述べたように、フロストの詩を巧みに引用しながら、読者に環境に優しい道を進むことを促している。最終章は人間存在そのもの、化学物質を造り出し、それを自らの利益のためだけに使用する傲慢で不遜な人間中心主義的生き方を糾弾する。カーソンは文明や進歩という概念を問い直し、「高きに心を向け」、人間として成長、成熟するようにと読者を誘うのである。

『センス・オブ・ワンダー』の世界

短い自然エッセイで、30分もあれば全部通読できる。テキスト(第11章)にも作家の高田宏が本文を引用しながら書かれたエッセイがあるので参考になろう。子供とどのように自然界を共有(share)するかが書かれており、今の皆さんにはわかりづらいかもしれないが、皆さんが家庭を持ったときもう一度読んでほしいと念を押した。幼児期において、家庭での教育や環境教育がいかに重要であるかを教えてくれる¹²。かつて『驚異の感覚』と訳されたこともある本書が『センス・オブ・ワンダー』になったのは、wonderという言葉が日本語にはない深い意味があるからである。O E Dの定義(The emotion excited by the perception of something novel and unexpected, or unexplicable; curiosity. Astonishment mingled with perplexity or bewildered curiosity.)を板書して説明する。訳者が原書にはない「不思議さや神秘さに目を見張る感性」と付け加えたのは、日本人読者を思っただけのことである。では「ワンダー」とは何か。テキスト(146)に掲載された幼い少女が虫メガネ片手に熱心に草むらを眺める時のつぶらな瞳こそ、ワンダーの極地なのである。

ちょうど皆さんが子供の頃、天上に架かる七色の虹を初めて見た時を思い出してほしい。大人になれば、虹は大気中に浮かぶ水の粒子が太陽の光りを浴びてできる自然現象と頭で考えるが、子供にとっては心の中まで染み込んでいく。これが「センス・オブ・ワンダー」なのだ。テキスト(151)で紹介された「ネイチャーメディテーション」や「美の小道」は、演習形式の授業では活用できる。授業で筆者はいつもワーズワスの「虹」を取り上げ、英語と日本語で熱唱することになっている¹³。降旗信一『ネイチャーゲームでひろがる環境教育』の中で取り上げられたネイチャーゲームのアクティビティーの一つ、「大地の窓」にある幼な子の写真、大地に仰向けになり、落ち葉を体にかけて、じっと天空を見つめるこの幼な子のこれまたつぶらな瞳こそワンダーの世界である(124)。個人的なことを言えば、この写真は私のお気に入りの一枚である。

本章で中心的に教えたことは、テキスト(第10章)にあるネイチャーゲーム(2013年からシェアリングネイチャーに改称)である。アメリカの環境文学教育では野外実習が積極的に取り入れられているのに対し、日本での環境文学研究者のあいだではすでに述べたように様々な制約があり、ほとんど実施されていない。ネイチャーゲームは環境教育の分野で一部の大学ではすでに行われているが、環境文学教育にも活かせるのではないだろうか。特にカーソンの『センス・オブ・ワンダー』を教える際には、ネイチャーゲームは野外実習の一つの方法として効果がある。今回の講義では自然体験は机上での想像力での体験となったが、日本で制作され、訳者の上遠氏が語りをするドキュメンタリー映画『センス・オブ・ワンダー』を参考にするとよいだろう。自然体験は日本の環境文学教育では最も遅れた分野である。一朝一夕にはいかないが、様々なプログラムを開発する必要がある。

『失われた森』——カーソンのメッセージ

カーソンの伝記を著したリンダ・リアが、それまで収録されていなかった作品(雑誌、講演、手紙等)を遺稿集としてまとめたものである。環境文学作家としてのカーソンの成長過程を考察する上で必須の文献であり、この遺稿集によってカーソン研究は一段と深化する契機となった。詳細はテキストにゆずるとして、特に注目したいのはカーソンがアメリカのネイチャーライティングの伝統を意識した上で、さらに時代に合った文学(環境文学)を創造しようと意図していたことである。「パローズやジェフリーズ、ハドソン、ソローの精神に忠実であるなら、私たちは彼らを模倣するのではなく、彼ら自身と同じく、思考や知識の領域の開拓者であらねばなりません。彼らが時代の代弁者であったように、私たちもまたこの時代の代弁者として、新しいタイプの作品を創造するのです」(「ネイチャーライティングの意匠」“The Design for Nature Writing” 138)¹⁴。

もう一つ注目したいのは、彼女の最後の講演となった「環境の汚染」である。この講演の特徴は、確かに『沈黙の春』でも何箇所かで言及されていたものの、『沈黙の春』の究極のテーマはあくまでも殺虫剤をはじめとする農薬の生態系への汚染が中心であった。ところが講演では農薬を超えて放射能汚染の危険性が詳しく語られていることである。元来カーソンは放射能に関心があり、このテーマで書くことを望んでいたが、喫緊の殺虫剤や除草剤の危険性が身に迫るにつれて、放射能の問題は後回しせざるをえなかった。おそらく長生きしていれば、私たちに多くの啓示を与えてくれたはずの著書が書かれたにちがいがなかった。もともと原子力時代に生きたカーソンにとって、広島・長崎への原爆投下に始まり、地上・地下核実験、平和的な核の利用から核廃棄物処分の問題まで疑念に満ちた状況であったはずだ。特に彼女が懸念したのは、自らの専門領域である海が、核廃

棄物の汚染で本来の機能を失うのではないかということであった。

驚くべきことは、カーソンが繰り返し「セシウム137」、「ストロンチウム90」、「放射性ヨウ素」などの放射線物質に混じって「ホット・スポット」(328)にまで言及していることである。まさに2011年3月11日以降の忌まわしい日本の現状と重なってくる。私たちは地球温暖化ばかりに目を奪われ、放射能の危険性を忘れていた。確かにスリーマイル島の事故、チェルノブイリの事故などの先例はあったが、外国のことにあまり関心を向けてこなかったこともある。今「環境の汚染」という講演原稿を読むと、私たちは高木仁三郎たちの意見にも耳をかさず、ましてや『沈黙の春』の警告をも無視して、物質文明を謳歌し続けていたのだった。そのつけを払うのに私たちの未来世代までを拘束することになろうとはだれも予想しなかったであろう。カーソン曰く「私たちが住む世界に汚染を持ちこむというこうした問題の根底には道義的責任——自分たちの世代ばかりでなく、未来の世代に対しても責任をもつこと——についての問いがあります」(332)。カーソンの最後のメッセージは、現代文明を問い直し、未来世代のためにも「高きに心を向け」て、「べつの道」を模索することだ。彼女の遺言は切々と我々の心に響いてくる¹⁵。

4. むすび——授業を振り返って

ASLE-US 創設 (1992年) の前から環境文学教育に関する著 *Teaching Environmental Literature: Materials, Methods, Resources* (1985) が MLA の文学教育シリーズの一冊として出版されていたのは驚きだが、2008年同じく MLA から *Teaching North American Environmental Literature* が出版され、2012年には *Teaching Ecocriticism and Green Cultural Studies* が出版された。その他野外実習に関する著書もいくつか出版されている。本稿はこれらの先行研究を参照しながら日米環境文学教育の問題点と課題を挙げて論じたが、日本の環境文学教育に役立ちそうな論を若干補足しておこう。

『北米環境文学の教え方』の中にちょうどカーソンを取り上げた論考がある。スミス「初心者」の大学生に語る——作文クラスにおける『沈黙の春』によれば、『沈黙の春』は大学での論文作成のスキルを教えるのに最適のツールで、批判的思考力と分析力を養い、経済、経営、産業、女性研究、公共政策、文学、歴史研究、科学やテクノロジーといった様々な関心事を喚起する (237)。確かに『沈黙の春』にはスミスの主張する一面はあるが、日本で導入できるかどうかは不明。このような学際的な内容は、一人の教員では困難であるように思われる。オムニバス方式のような授業形態が望ましい。

チャンドラー「楽園のなかの機械文明——コンピュータを活用した環境文学教育」の論は、限られた時間と資源の中で有効な教授方法となりうる可能性を持つ。特に風景や絵画、映像などのような環境表象分野での活用が期待される。

著名なエコクリティックであるグレン・A・ラヴのお薦めの入門書は Edward O. Wilson, *Biophilia* (1984) である。ウィルソンは言わずとした生物多様性研究の第一人者で、科学と文学に秀でていた。『バイオフィリア』は科学的材料に想像的・倫理的意味を探究する (253) 書であると語る。ラヴは「エコクリティックは科学や科学分野を知らねばならぬ」(251) と語る。先に述べた「科学に弱いエコクリティック」(257) と同様、私たち自身も不断の努力が要求されている。その他、野外実習 (自然体験プログラム) に関しては、残念ながら、日本ではまだ存在感が薄い。

他分野の教員や、NGO との連携の中で可能性を見出すことが必要であろう。

授業を振り返って見ると、レイチェル・カーソンを中心に据え、多岐にわたる内容を充実させながら、文学や環境に対する初心者学生を多少なりとも取り込んだつもりであるが、やはり何度かの授業経験が役に立つ。筆者自身がカーソンを教えるのは今回で3度目、毎回の講義メモへの書き込みが増えてゆくのに充実感を覚える。レポートを読み終えて、少なくとも自然や環境への動機付けや、さらなる知的欲求の機会を与えたことは確信できる。このような学生の要求を満たす体系的なプログラムの開発が早急に望まれる。

※ 本稿は2012年度開講の「環境文化論」講義用メモを加筆・修正したものである。言及できなかった箇所は注に拠ったので、必然的に注が多くなってしまった。なお本稿で言及した事実の仔細は2012年時点のものである。

注

1. 大野美砂編「名作シリーズ」『エコクリティシズム・レビュー』5 (2012):48-53. 要旨が掲載されている。
2. 山城新「ナラティヴスカラーシップとエコクリティシズム」『文学と環境』8 (2005):54-57. 参照
3. 『原田正純追悼集 この道を——水俣から』(熊日情報文化センター、2012) に石牟礼氏が追悼文を寄せている。原田氏の言葉「私は水俣病と出会うことで人生が輝いて見えた幸せもの」が印象的。
4. 2013年を迎えると、中国各地で激しい大気汚染が発生。PM2.5と呼ばれる有害物質が日本にも飛来してきた。環境汚染に国境はない。
5. 土居光明『西谷退三考』(日米学院出版部、1990) 参照。
6. 文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング』(ミネルヴァ書房、2000) を何度かテキストとして使用した経験が役立った。
7. 本稿では詳しいカーソンの生涯を割愛せざるをえなかった。拙稿「べつの道を歩む——レイチェル・カーソンの生涯」『国際社会文化研究』第14号 (2013):1-17. を参照のこと。
8. 黒板に図示して説明すると効果的。なお『沈黙の春』出版50年にあわせて Roger Meiners, Pierre Desrochers, and Andrew Morriss, eds. *Silent Spring at 50: The False Crises of Rachel Carson*. Washington, D.C.: Cato Institute, 2012. が出版された。カーソンの科学的データの不備を指摘し、益よりも害が多い著書と決め付ける。筆者はカーソンの高尚な理念が意図的に歪められていると解する。
9. 授業中に驚いたことであるが、今の若者はシュバイツァーについて何も知らなかったことである。実際のところ、日本では彼の著作は現在絶版となっている。
10. 食物栄養35%、タバコ30%、職業4%、アルコール4%、放射能・日光3%、環境汚染2% (118) とある。永田親義『がんはなぜ生じるか』(講談社、2007)
11. We stand now where two roads diverge. But unlike the roads in Robert Frost's familiar poem, they are not equally fair. The road we have long been traveling is deceptively easy, a smooth superhighway on which we progress with great speed, but at its end lies disaster. The other fork of the road—the one "less traveled by"—offers our last, our only chance to reach a destination that assures the preservation of our earth.
12. Keitaro, Morita. "Nature Writing Cultivates Ecological Identity: A Case Study of an Environmental NGO in Japan." 『文学と環境』15 (2012):17-27. 参照。
- 13.

"The Rainbow"

William Wordsworth

My heart leaps up when I behold

A rainbow in the sky:

So was it when my life began,
 So is it now I am a man,
 So be it when I shall grow old
 Or let me die!

The Child is father of the Man:
 And I could wish my days to be
 Bound each to each by natural piety.

14. 古草訳では「自然を描く意図」となっている。

15. 2012年9月(近畿大学)、文学・環境学会ラウンドテーブル「『沈黙の春』出版50年」の筆者発表原稿より。

Works Cited

- Chandler, Katherine R. "The Machine in the Garden": Using Electronic Portfolios to Teach Environmental Literature." *Teaching North American Environmental Literature*. Ed. Laird, Christensen, Mark C. Long, and Fred Waage. New York: MLA, 2008. 223-35.
- Garrard, Greg, ed. *Teaching Ecocriticism and Green Cultural Studies*. Palgrave Macmillan: New York, 2012.
- Love, Glen A. "Teaching Environmental Literature on the Planet Indivisible." *Teaching North American Environmental Literature*. 248-55.
- Smith, Cheryl C. "Giving Voice to the Novice Authority: *Silent Spring* in the Composition Classroom." *Teaching North American Environmental Literature*. 236-47.

伊藤詔子監修『オルタナティブ・ヴォイスを聴く』鶴見書店、2011。

カーソン、レイチェル / 古草秀子訳『失われた森』集英社文庫、2009。

_____ / 上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社、1996。

_____ / 青樹築一訳『沈黙の春』新潮文庫、2004。

上岡克己・上遠恵子・原強共編著『レイチェル・カーソン』ミネルヴァ書房、2007。

降旗信一『ネイチャーゲームでひろがる環境教育』中央法規、2001。

ブルックス、ポール / 上遠恵子訳『レイチェル・カーソン』新潮社、2004。

リア、リンダ / 上遠恵子訳『レイチェル——レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』東京書籍、2002。

レオポルド、アルド / 新島義昭訳『野生のうたが聞こえる』講談社学術文庫、1997。

受理年月日 平成27年11月26日

